

花ちゃん、オー君、モンタ博士のわくわくドキドキ冒険記3

国立市立国立第七小学校

平成27年4月21日 NO.9 (209)

花ちゃん 「モンタ博士！つぎに、どうしてツバキや早春そうしゅんから春はるに咲くのですか。」

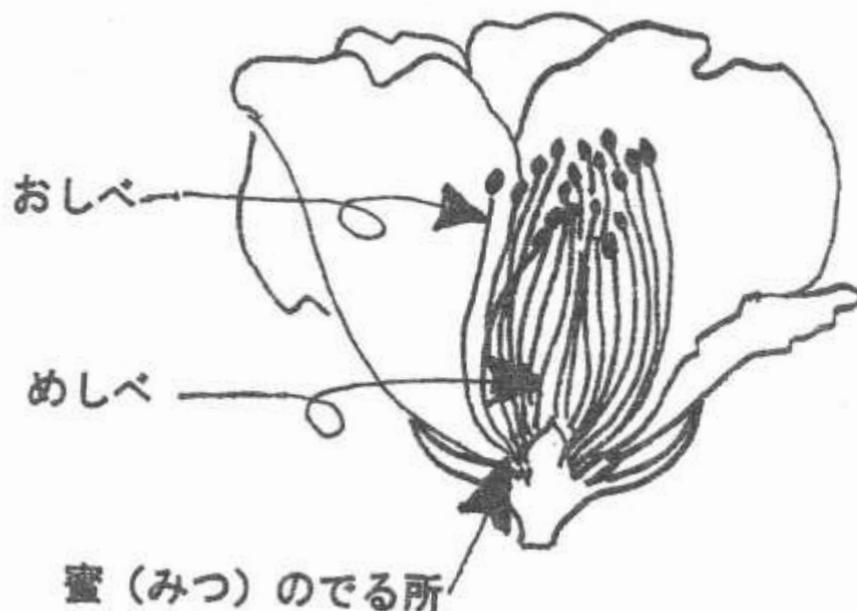
モンタ博士 「それはね、鳥とりとの関係かんけいからなんだよ。」

花ちゃん 「鳥・・・あ！そうね。寒さむくては虫むしも飛とばないわ。それで、ツバキは鳥とりに花粉かふんを運はこんでもらうのね。そういうのを風媒花ふうばいかではなくて、虫媒花ちゅうばいかではなくて、鳥媒花とりばいかというのね。」

モンタ博士 「そうだよ。鳥とりは爬虫類はちゅうるいなどの変温動物へんおんどうぶつと違ちがっていつも体温たいおんが温あたたかいね。そういうのを恒温動物こうおんどうぶつというんだけど、とてもたくさんのカロリーひつようが必要ひつようなんだ。そのために、ツバキのおしべ・めしべのもとにあるたくさんの甘い蜜あまみつをもらうわけさ。その時に花粉かふんが体からだについて、その花粉かふんがめしべについて、実みができるということだね。」

オー君 「そうなんですか。なるほど。つぎに、ツバキの花はなはどうして大きおおいのですか。」

モンタ博士 「つまり、それも鳥とりのためなのさ。小さな花はなでは、鳥とりが口くちばしでつついたらすぐにこわれてしまうだろう。それに、鳥とりは大きおおくて重おもいだろう。それで、ツバキの花はなびらは厚あつくて、花はなの作りが大きおおく頑丈がんじょうにできているのさ。さらに、花はなが横よこむ向きに咲さいているのも、鳥とりが蜜みつを吸すいやすくなるためさ。」



オー君 「なるほど。そういうことですか。それで、さっきから蜜とか甘いとかのお話になっていてでしょ。ぼく、何だかおなかがすいてしまったな。」

モンタ博士「それじゃ、ツバキの花を分解して蜜をなめてみよう。」

花ちゃん 「直接体験するということですね。五感を使うということですね！」

モンタ博士「その通り。お話を聞いたり本を読んだりするのも大切だけど、実験が一番。でも、お口に入れるものは、よく知っている人に聞かないとだめだよ。それじゃ、ツバキの花を分解して、ほら、水滴みたいに光っているのが蜜さ。」

オー君 「あ！あまーい。あまーい。これなら鳥も喜ぶね。」

モンタ博士「五感の観察として鼻も使ってごらん。ツバキの花はどんなにおいがするかな。スイセンのようなにおいかな。バラのようなにおいかな。」

オー君 「クンクン。クンクン。あれ？何もにおわないぞ。」

花ちゃん 「クンクン。クンクン。本当だわ。ふつうのお花というのは、においがするはずなのに。おかしいわ。」

モンタ博士「においがしないだろう。それじゃ、においは何のためかをよく考えてごらん。」

オー君 「虫が来るようににおいをだすんだ。でもツバキには必要ないんだ。」

モンタ博士「鳥は鼻がにぶいんだ。花ににおいはいらないうことなのさ。。」

花ちゃん 「最後の質問ですが。ツバキの花はどうして赤いのですか。」

モンタ博士「いい質問だね。これも鳥と関係があるんだよ。鳥という生き物は『赤』という色をもっとも強く感じる事ができるのさ。つまり、『赤』が好きなんだね。」

花ちゃん 「ツバキは鳥にたくさん来てもらって、花粉をたくさん付けてもらって、たくさん受粉をしてもらって、実をつけるもらうためということですね。」

モンタ博士「その通り。鳥たちの食欲をさそうためなのさ。これは人間だって同じなんだ。つまり、街を歩いていてハンバーガーやさんとか、牛丼屋さんとか、中華料理屋さんとか、モンタ博士がよく行く赤ちょうちん（飲み屋さん）とか、みーんな『赤』っぽい色が基調・ベースになっているだろう。青いふりかけを作ったらぜんぜん売れなかったというお話もあるくらいだ。つまり、食欲をさそう色が『赤』なのさ。」